

夫人利生記

泉鏡花

青空文庫

瑠璃色に澄んだ中空の樹の間から、竜が円い口を張開いたような、釣鐘の影の裡で、
 密と、美麗な婦の——人妻の——写真を視た時に、樹島は血が冷えるように悚然とした。

……

山の根から湧いて流るる、ちよろちよろ水が、ちようどこで堰を落ちて、湛えた底に、
 上の鐘楼の影が映るので、釣鐘の清水と言うのである。

町も場末の、細い道を、たらたらと下りて、ずつと低い処から、また山に向つて径の坂
 を蛇つて上る。その窪地に当るので、浅いが谷底になっている。一方はその鐘楼を高く乗
 せた丘の崖で、もう秋の末ながら雑樹が茂つて、からからと乾いた葉の中から、昼の月も、
 鐘の星も映りそうだが、別に札を建てるほどの名所でもない。

居まわりの、板屋、藁屋の人たちが、大根も洗えば、菜も洗う。葱の枯葉を掻分けて、
 洗濯などするのである。で、竹の筧を山笹の根に掛けて、流の落口の外に、小さな滝を
 仕掛けてある。汲んで飲むものはこれを飲むがよし、視めるものは、観るがよし、すなわ
 ち清水の名聞が立つ。

径を挟んで、水に臨んだ一方は、人の小家の背戸畠で、大根も葱も植えた。竹のまば

ら垣に藤豆の花の紫がほかほかと咲いて、そこらをスラスラと飛交わす紅蜻蛉の羽から、……いや、その羽に乗って、糸遊、陽炎という光ある幻影が、春の闌なるごとく、浮いて遊ぶ。……

一時間ばかり前の事。——樹島は背戸畑の崩れた、この日当りの土手に腰を掛けて憩いつつ、——いま言う——その写真のぬしを正のもので見たのである。

その前に、渠は母の実家の檀那寺なる、この辺の寺に墓詣した。

俗に赤門寺と云う。……門も朱塗だし、金剛神を安置した右左の像が丹であるから、いずれにも通じて呼ぶのであろう。住職も智識の聞えがあつて、寺は名高い。

仁王門の柱に、大草鞋が——中には立つた大人の胸ぐらいなのがある——重つて、稲

束の木乃伊のように掛つてゐる事は、渠が小児の時に見知つたのも、今もかわりはない。

緒に結んだ状に、小菊まじりに、俗に坊さん花というのを挿して供えたのが——あやめ草あしに結ばむ——「奥の細道」の趣があつて、健なる神の、草鞋を飾る花たばと見ゆるまで、日に輝きつつも、何となく旅情を催させて、故郷なれば可懐しさも身に沁みる。

峰の松風が遠く静に聞えた。

庫裡くらりに音信おとずれて、お墓経をと頼むと、気軽に取り次がれた住職が、納所なつしよとも小僧ともいわず、すぐに下駄かたばきで卵塔場へ出向でむかわるる。

かあかあと、鴉からすが鳴く。……墓所はかしよは日陰である。苔こけに惑い、露すべに泣なつて、樹島がやや慌あわしかったのは、余り身軽に和尚どのが、すぐに先へ立って出られたので、十八九年不沙ぶさ汰たした、塔婆の中の草徑くさみちを、志す石碑に迷ったからであつた。

紫袱紗ふくさの輪鉦りんを片手に、

「誰方どなたの墓であらつしやるかの。」

少々極きまりが悪く、……姓を言うと、

「おお、いま立っていさつしやるのが、それじゃがの。」

「御不沙汰をいたして済みません。」

黙もくつて俯向うつむいて線香を供えた。細い煙が、裏すいて乱るるばかり、墓の落葉は堆うずたかい。湿しつつた青苔に蝟燭ろうそくが刺さつて、揺れもせず、燐寸マツチでうつした灯がまっ直すくに白く昇たつた。

チーン、チーン。——かあかあ——と鴉が鳴く。

やがて、読誦どくじゆの声を留とどめて、

「お志の御回向えこうはの。」

「一同にどうぞ。」

「先祖代々の諸精霊……願以此功德無量壇波羅蜜。具足円満、平等利益——南
無妙……此経難持、若暫持、我即歡喜……一切天人皆応供養。——」

チーン。

「ありがとうございます。」

「はいはい。」

「御苦労様でございました。」

「はい。」

と、袖そでに取った輪鉦形りんなりに肱ひじをあげて、打傾きざまに、墓参の男を熟じつと視みて、

「多くは故人になられたり、他国をなすつたり、久しく、御墓参の方もありません。……
あんたは御縁辺であらつしやるかの。」

「お上人様。」

裾すそ冷く、鼻はなじろんだ顔を上げて、

「——母の父母ふたおや、兄などが、こちらにお世話になっております。」

「おお、」と片足、胸とともに引いて、見直して、

「これは樹島の御子息かい。——それとなくおたよりは聞いております。何よりも御機嫌での。」

「御僧様こそ。」

「いや、もう年を取りました。知人は皆二代、また孫の代じや。……しかし立派に御成人じやな。」

「お恥かしゅう存じます。」

「久しぶりじや、ちと庫裡へ。——渋茶など進ぜよう。」

「かさねまして、いずれ伺いますが、旅さきの事でございますし、それに御近所に参詣をしたい処もございますから。」

「ああ、まだお娘御のように見えた、若い母さんに手を曳かれてお参りなさった、——あの、摩耶夫人の御寺へかの。」

なき、その母に手を曳かれて、小さな身体は、春秋の蝶々蜻蛉に乗ったであろう。夢のように覚えている。

「それはそれは。」

と頷いて、

「また、今のほどは、御丁寧に——早速御仏前へお料具を申そう。——御子息、それならば、お静しずかに。……ああ、上のその木戸はの、錠、鍵も、がさがさと壊れています。開けたままで宜よろしい。あとで寺男おとこが直しますでの。石段が欠けて草蓬ぼうぼう々じや、堂前へ上らつしやるに氣を着けなされよ。」

この卵塔は窪地である。

石を四五壇、せまり伏す枯尾花ねずみころもに鼠の法衣の隠れた時、ばさりと音して、塔婆近い枝に、山鴉てんぐが下りた。葉がくれに天狗の枕のように見える。蠟燭ろうそくを啄ついばもうとして、人の立去るのを待つのである。

衝つと衝くえると、大概是山へ飛ぶから間違まちがいはないのだが、怪我けがに屋根へ落すと、草葺くさぶきが多いから過失あやまちをしでかすことがある。樹島は心得て吹消した。線香の煙の中へ、色うすを淡く分けてスツと蠟燭の香が立つと、かあかあと堪たまらなそうに鳴立てる。羽音もきこえて、声の若いのは、仔鳥こがらすらしい。

「……お食あがり。」

それも供養になると聞く。ここにも一羽、とおなじような色の外套がいとうに、洋傘こうもりを抱いて、ぬいだ中折帽なかおれを持添えたまま葎むぐらの中を出たのであった。

赤門寺に限らない。あるいは丘に、坂、谷に、徑を縫う右左、町家が二三軒ずつ門前にあるばかりで、ほとんど寺つづきだと言っても可い。赤門には清正公が祭つてある。北辰妙見の宮、摩利支天の御堂、弁財天の祠には名木の紅梅の枝垂れつつ咲くのである。明星の丘の毘沙門天。虫歯封じに箸を供うる辻の坂の地藏菩薩。時雨の如意輪觀世音。笠守の神。日中も梟が鳴くという森の奥の虚空蔵堂。――

清水の真空の高い丘に、鐘樓を営んだのは、寺号は別にあるう、皆梅鉢寺と覚えている。石段を攀じた境内の桜のもと、分けて鐘樓の礎のあたりには、高山植物として、こうした町近くにはほとんどみだされないと称うる処の、梅鉢草が不思議に咲く。と言伝えて、申すまでもなく、学者が見ても、ただ心ある大人が見ても、類は違うであろうけれども、五弁の小さな白い花を摘んで、小児たちは嬉しがったものである。――もつとも十ぐらいまでの小児が、家からここへ来るのには、お弁当が入用だった。――それだけに思出がなお深い。

いま咲く草ではないけれども、土の香を親しんで。……樹島は赤門寺を出てから、仁王尊の大草鞋を船にして、寺々の巷を漕ぐように、秋日和の巡礼街道。――一度この鐘樓に上つたのであつたが、攀じるに急だし、汗には且つなる、地内はいずれ仏神の垂跡

に面して身がしまる。

旅のつかれも、ともに、吻と一息したのが、いま清水に向った大根畑の縁であつた。

……遅めの午飯に、——湯で漁れる——わかさを焼く香が、淡く遠くから匂つて来た。暖か過ぎるが雨にはなるまい。赤蜻蛉の羽も、もみじを散して、青空に透通る。鐘は高く竜頭に薄霧を捲いて掛つた。

清水から一坂上り口に、薪、漬もの桶、石臼なんどを投遣りにした物置の破納屋が、炭焼小屋に見えるまで、あたりは静に、人の往来はまるでない。

月の夜はこの納屋の屋根から霜になるであらう。その石臼に縫つて、嫁菜の咲いたも可哀である。

ああ、桶の箍に尾花が乱るる。この麗かさにも秋の寂しさ……

樹島は歌も句も思わずに、畑の土を、外套の背にずりこつて、半ば寝つつも、金剛神の草鞋に乗つた心持に恍惚した。

ふと鳥影が……影が翳した。そこに、つい目の前に、しなやかな婦が立った。何、……紡績らしい紺の一枚着に、めりんす友染と、縺子の幅狭な帯をお太鼓に、上から紐でしめて、褪せた桃色の襷掛け……などと言うより、腕露呈に、肱を一杯に張つて、片脇に

盥たらひを抱いだえた……と言う方が早い。洗濯をしに来たのである。道端の細ほそ流ながれで洗濯をするのに、なよかななどと言う姿はない。——ないのだが、見ただけでなよやかで、盥たらひに力を入れた手が、霞を溶いたように見えた。白やかな膚はだを徹とおして、骨まで美しいのであろう。しかも、素足に冷めし草履わらじを穿はいていた。近づくのに、音のしなかったのも頷うなずかれる。

婦おんなは、水ぎわに立停たちどまると、洗濯盥——盥には道草に手打たつたらしい、嫁菜が一束挿してあつた——それを石の上へこごみ腰におろすと、すつと柳に立直つた。日あたりを除よけて来て、且つ汗ばんだらしい、姉あねさん被かぶりの手拭てぬぐいを取つて、額えりよりは頸あし脚あしを軽く拭ふいた。やや俯うつむ向けになつた頸うなじは雪を欺あそく。……手拭を口に銜くわえた時、それとはなしに、面おもてに打蔽うちおほう風情が見えつつ、眉を優しく、斜ななめだちの横顔、瞳ぬれぬれの濡々ぬれぬれと黒目がちなのが、ちらりと樹島に移つたようである。颯さつと睫毛まつげを濃く俯目ふしめになつて、頸えりのおくれ毛を肱みもと白く搔ひ上げた。——漆にちらめく雪の蒔絵まきえの指さきの沈むまで、黒く房ふつさりした髪を、耳許みみもと清ひつつく引詰ひつまめて櫛くし巻まきに結つていた。年とし紀は二十五六である。すぐに、手拭を帯に挟んで——岸からすぐに俯向さしくには、手を差伸のしても、流ながれは低い。石段が出来ている。苔も草も露を引いて皆青い。それを下りさまに、ふと猶た予めつたように見えた。ああ、これは心ないと、見ているものの心着く時、褌つまを取つて高く端折はしよつた。婦おんなは誰も長襦袢ながじゆばんを着ているとは限

らない。ただ一重の布も、膝の下までは蔽わ^ふないで、小股をしめて、色薄く縊^{くび}りつつ、太^ふくらはぎ脛^かが白く滑^{なめ}かにすらりと長く流^{なが}れに立つた。

ひたひたと絡^{まつ}る水とともに、ちらちらと紅^{くれな}い目を遮^さつたのは、倒^{さか}に映^さるとい^まう釣鐘の竜の災でない。脱棄^{ぬぎす}てた草履に早く戯^{あそ}ぶる一羽の赤蜻蛉の影でない。崖のくずれを雑樹^{ざつじゆ}また藪^{やぶ}の中に、月夜の骸骨^{がいこつ}のように朽乱^くれた古卒堵婆^{ふるそとば}のあちこちに、燃えつつ曼珠沙華^{まんじゆしゃわ}が咲残^{さき}つたのであつた。

おんな 婦^{おんな}は人間離^{うつく}れをして麗^{うつく}しい。

この時、久米の仙人を思出して、苦笑をしないものは、われらの中に多くはあるまい。仁王の草鞋の船を落ちて、樹島は腰の土を払^{つら}つて立つた。面^{つら}はいつの間にか伸びている。「失礼ですが、ちよつと伺^{うかが}います——旅のものです。」

「は、」

れんぎようじ 「蓮行寺と申しますのは？」

「摩耶夫人様のお寺でございますね。」

その声にきけば、一層奥ゆかしくな^とうりてんとい切利天の貴女の、さながらの御^{おん}かしずきに対して、渠^{かれ}は思^{おも}わず一礼した。

おんな 婦はちようど^{かけひ} 簀の水に、嫁菜の茎を手すさびに浸していた。浅葱^{あさぎ}に霏^{しづく}する花を楯^{たて}に、破^やれなや^{のぼりみち} 納屋の上 路を指して、

「その坂をなぞえにお上りなさいますと、——戸がしまっておりすが、二階家が見えましよう。——ね、その奥に、あの黒く茂りましたのが、虚空蔵様のお寺でございます。ちようどその前の処が、青く明^{あかる}くなつて、ちらちらもみじが見えますわね……あすこが摩耶夫人様でございます。」

「どうもありがとう——尋ねたいにも人通りがないので困っていました。——お庇^{かげ}様で……」

「いいえ……まあ。」

「御免なさい。」

「お静^{しずか}におまいりをなさいますし……御利益がございますわ。」

と、嫁菜の花を口許^{くちもと}に、瞼^{まぶた}をほんのり莞爾^{にっこり}した。

——この婦人^{おんな}の写真なのである。

写真は、蓮行寺の摩耶夫人の御堂^{みどう}の壇の片隅に、千枚の歌留多^{かるた}を乱して積んだような写

真の中から見出された。たとえば千枚千人の婦女が、一人ずつ皆嬰兒を抱いている。お産の祈願をしたものが、礼詣りに供うるので、すなわち活きたままの絵馬である。胸に抱いたのも、膝に据えたのも、中には背に負したまま、両の掌を合せたのもある。が、胸をはだけたり、乳房を含ませたりしたのは、さすがにないから、何も蔽わず、写真はあからさまになっている。しかし、婦ばかりの心だしなみで、いずれも伏せてある事は言うまでもない。

この写真が、いま言った百人一首の歌留多のように見えるまで、御堂は、金碧蒼然としつつ、漆と朱の光を沈めて、月影に青い錦を見るばかり、厳に端しく、清らかである。御厨子の前は、縦に二十間がほど、五壇に組んで、紅の袴、白衣の官女、烏帽子、素袍の五人囃子のないばかり、きらびやかなる調度を、黒棚よりして、膳部、轅の車まで、金高蒔絵、青貝を鏤めて隙間なく並べた雛壇に較べて可い。ただ緋毛氈のかわりに、敷妙の錦である。

ことごとく、これは土地の大名、城内の縉紳、豪族、富商の奥よりして供えたものだと聞く。家々の紋づくしと見れば可い。

天人の舞樂、合天井の紫のなかば、古錦欄の天蓋の影に、黒塗に千羽鶴の蒔絵をし

た壇を据えて、紅白、一つおきに布を積んで、媚^{なまめ}かしく堆^{うずたか}い。皆新しい腹帯である。志して詣^{もつ}でた日に、折からその紅^{くれなゐ}の時は女の児^こ、白い時は男の児が産れると伝えて、順を乱すことをしないで受けるのである。

右左に大な花瓶^{わおき}が据^{すわ}つて、ここらあたり、花屋およそ五七軒は、囲^{かこ}の穴蔵を払ったかと思われる見事な花が夥^{おびただ}多い。白菊黄菊、大輪の中に、桔梗^{ききよう}がまじって、女郎花^{おみなえし}のまだ枯れないのは、功德の水の恵であらう、末葉^{うちは}も落ちず露がしたたる。

時に、腹帯は紅であつた。

渠^{かれ}が詣^{もつ}でた時、蠟燭^{ろうそく}が二挺灯^{ちよちも}つて、その腹帯台^{かたわら}の傍に、老女が一人、若い円鬚^{まるまげ}のと睦^{むつ}じそうに拝^{むつ}んでいた。

しばらくして、戸口でまた珠数を揉^もみいた^{ただ}頂^{ただ}いて、老女が前^{さき}に、その二人が帰つたあとは、本堂、脇堂にも誰も居ない。

ここに註^{ちゆう}しておく。都会にはない事である。このあたりの寺は、どこにも、へだて、戸じまりを置かないから、朝づとめよりして夕暮までは、諸天、諸仏。——中にも爾^{しか}く端麗なる貴女の奥殿に伺候^{しこう}するに、門番、諸侍の面倒はいささかもないことを。

寺は法華宗である。

祖師堂は典正なのが同一棟に別にあつて、幽巖なる夫人の廟よりその御堂へ、細長い古畳が欄間の黒い虹を引いて続いている。……広い廊下は、霜のように冷うして、虚空蔵の森をうけて寂然としていた。

風すかしに細く開いた琴柱窓の一つから、森を離れて、松の樹の姿のいい、赤土山の峰が見えて、色が秋の日に白いのに、向越の山の根に、きらきらと一面の姿見の光るのは、遠い湖の一部である。此方の麓に薄もみじした中腹を弛く繞つて、巳の字の形に一つ廻つた青い水は、町中を流るる川である。町の上には霧が掛つた。その霧を抽いて、青天に聳えたのは昔の城の天守である。

聞け——時に、この虹の欄間に掛けならべた、押絵の有名な額がある。——いま天守を叙した、その城の奥々の婦人たちが丹誠を凝した細工である。

万亭応賀の作、豊国画。錦重堂板の草双紙、——その頃江戸で出版して、文庫蔵が建つたと伝うるまで世に行われた、釈迦八相倭文庫の挿画のうち、摩耶夫人の御ありさまを、絵のまま羽二重と、友染と、綾、錦、また珊瑚をさえ鏤めて肉置の押絵にした。……

浄飯王が狩の道にて——天竺、天臂城なる豪貴の長者、善覺の妹姫が、姉君嬌曇弥とともに、はじめて見ゆる処より、優陀夷が結納の使者に立つ処、のちに、嬌曇弥

が嫉妬しつとの処。やがて夫人が、一度、幻に未生みしょうのうな子うなこを、病中のいためる御胸おんむねに、抱いだきしめたまう姿は、見る目にも痛ましい。その肩にたれつつ、みどり児うなこの頸おのを蔽おほう優やさしき黒髪は、いかなる女子じよのか、活髪いきがみをそのままに植えてある。……

われら町人の爺じいば嬪ばいの風説ふうせきであろうが、矯曇弥のろいの呪詛のろいの押絵は、城中の奥のうち、御台、正室ではなく、かえつて当時の、側室、愛妾あいしやうの手に成つたのだと言うのである。しかも、その側室は、絵をよくして、押絵おしかきの面描かおかきは皆その彩筆に成つたのだと聞くのも意味がある。

夫人の姿像のうちには、胸ややあらわに、あかんぼのお釈迦様を抱いだかるるのがあるから、
——憚りはばかつつも謹んで説いおう。

ここの押絵のうちに、夫人が姿見のもとに、黒塗の蒔絵の盥を取つて手水を引かるる一面がある。真珠を雪に包んだような、白羽二重で、膚脱はだぬぎの御乳おんちのあたりを装つてある。肩も背も半身の膚はだえあらわにおわする。

牙きばの六つある太白象たいびやくぞうの背に騎して、兜率天とそつてんよりして雲を下つて、白衣の夫人の寢
 姿の夢まくらに立たせたまう一枚のと、一面やや大なる額に、かの藍毘尼園中らんびにおんちゆう、池に青
 色いしよくの蓮華れんげの開く処。無憂樹むうじゆの花、色香鮮麗せんれいにして、夫人が無憂の花にかざしたる右

の手のその袖のまま、釈尊降誕の一面とは、ともに城の正室の細工だそうである。

面影も、色も^{たなび}靨いて、欄間の雲に浮出づる。影はささぬが、香にこぼれて、後にひかえつつも、畳の足はおのずから爪^{つま}立たれた。

畳廊下を引返しざまに、敷居を出る。……夫人^{ぶにん}廟^{びやう}の壇の端に、その写真の数々が重ねてあつた。

押絵のあとに、時代を違えた、写真を^{のぞ}覗くのも学問である。

清水に洗濯した美女の写真は、ただその四五枚めに早く目に着いた。円^{まる}髻^{まげ}にこそ結つたが、羽織も着ないで、女の児^こらしい嬰兒^{みどりご}を抱いて、写真屋の椅子にかけた像^{かたち}は、寸分の違いもない。

こうした写真は、公開したもおなじである。産の安らかさに、児のすこやかさに、いづれ願ほどにあやかするため、その一枚を選んで借りて、ひそかに持帰る事を許されている。ただし遅速はおいて、複写して、夫人^{おん}の御人々御中に返したてまつるべき事は言うまでもなからう。

今日は方々にお賽^{さい}銭^{せん}が多い。道中の心得に、新しく調えた懷中に半紙があつた。目の露したたり、口^{くちもと}許^ほも綻^{はら}びそうな、写真を取って、思わず、四辺^{あたり}を見て半紙に包も

うとした。

トタンに人氣勢ひとけはいがした。

樹島はバツとあかくなつた。

猛然として憶起おもいおこした事がある。八歳やっつか、九歳ここのつの頃であろう。雛人形ひなにんぎようは活いきて

いる。雛市ひないちは弥生やよいばかり、たとえば古道具屋の店に、その姿があるとする。……心を籠こめ

て、じつと凝視みつめるのを、毎日のように、およそ七日十日に及ぶと、思入しりぞつたその雛、その

人形は、莞爾にっこりと笑うというのを聞いた。——時候は覚えていない。小学校へ通う大川の

橋一つ越えた町の中に、古道具屋が一軒、店に大形の女雛めびなばかりが一体あつた。藤長とうたけけた

美しさは註するに及ぶまい。——樹島は学校のかえりに極きまつて、半時ばかりずつ熟じつと凝視

した。

目は、三日四日めから、もう動くようであつた。最後に、その唇の、幽冥ゆうめいの境より霞

一重に暖かいように莞爾にっこりした時、小児こどもはわなわなと手足が震えた。同時である。中仕切

の暖簾のれんを上げて、姉さんだか、小母さんだか、綺麗きれいな、容子ようすのいいのが、すつと出て来て、

「坊ちゃん、あげましょう。」と云つて、待て……その雛ではない。定紋じやうもんつきの塗長持ぬちやうぢの

上に据えた緋ひの袴はかまの雛のわきなる柱に、矢をさした鞆うづぼと、細長い瓢箪ひやうたんと、靈芝れいしのよう

なものと一所に掛けてあつた、——さ、これが変だ。のちに思つても可思議なのだが、……くれたものというほつすと払子に似ている、木の柄が、草石蚕ちようろうぎのように巻きぼりして、蝦えびい色に塗つてあるさきの処に、一尺ばかり革の紐がばらりと一束ついている。絵で見た大將が持つ采配さいはいを略したような、何にするものだか、今もって解わからない。が、町々辻々に、小児こどもという小児が、皆おもちゃを持つて、振ったり、廻したり、空を払いはたたりして飛廻つた。半年ばかりですたれたが、一種の物妖ぶつようと称とえて可よからう。持たないと、生効いきがいのなほど欲しかつた。が樹島にはそれがなかつた。それを、夢のように与えられたのである。橋の上を振廻して、空を切つて駈かけ戻つた。が、考えると、……化払子ばけほつすに尾が生えつつ、宙を飛んで追駈おっかけたと言わねばならない。母のなくなつた、一周忌の年であつた。父は兄この手の化ものを見ると青くなつて震えた。小遣錢をなまで持たせないその兄の、盗心ぬすみごころを疑つて、怒つたよりは恐れたのである。

真偽を道具屋にたしかめるために、祖母がついて、大橋を渡る半ばで、母のおくつきのある山の峰を、孫のために拝んだ、小児こどもも小さな両手を合せた。この時の流ながれの音おそろしの可おそろし恐おそろしさは大地が裂けるようであつた。「ああ、そうとは知りませぬ。——小児衆の頑がんはない、欲しいものは欲しかろうと思つて進ぜました。……毎日見てござつたは難じやつたか。——

—それはそれは。……この雛はちと大金たいまいのものゆえに、進上は申されぬ——お邪魔な
くばその玩弄品おもちゃは。」と、確しかと祖母に向つて、道具屋が言つてくれた。が、しかし、その
時は綺麗な姉さんでも小母さんでもない。不精髻ぶしょうひげの胡麻塩ごましおの親仁おやしであつた。と、ばけ
ものは、人の慾よくに憑ついて邪心を追つて来たので、優い婦やさしひとは幻影まぼろしばかり。道具屋は、稚おさな
いのを憐あわれがつて、嘘で庇かばつてくれたのであらうも知れない。——思出すたびに空恐ろしい
気がいつもする。

——おなじ思おもが胸むねを打つた。同時であつた、——人氣勢ひとけはいがした。——

御廟子みづしの裏へ通う板廊下の正面の、簾すだれすかしの観音びらきの扉とが半ば開きつつ薄うす明あかる
い。……それを斜ななめにさし覗のぞいた、半身の氣高い婦人がある。白衣に緋を重ねた姿だと思え
ば、通夜の籠こもり堂どうに居合せた女にょしやう性じやうであらう。小紋の小袖に丸帯と思えば、寺には、
よき人の嫁ぐならいがある。——あとで思うとそれも臆おぼろである。あの、幻の道具屋の、綺
麗ひとな婦ひとのようでもあつたし、襦うちかけすがたふりそで襦う襦ち姿振袖の額の押絵の一体のようにも思う。……
瞬間には、ただ見られたと思う心を、棒にして、前後も左右も顧みず、衝つ々と出、その
裳もすそに両手をついて跪ひざまずいた。

「小兒は影法師も授さずりません。……ただあやかりとう存じます。——写真は……拝借出来

るのでございましょうか。」

舌はここで爛ただれても、よその女を恋うるとは言えなかったのである。

「どの、お写真。」

と朗ほがらに、しつとり聞えた。およそ、妙たえなるものごしとは、この時言うべき詞ことばであつた。

「は、」

と載せたまま白紙しらかみを。

「お持ちなさいまし。」

あなたの手で、スツと微かすかな、……二つに折れた半紙の音。

「は、は。」

と額に押頂くと、得ならず艶えんなるものの薫かおりに、魂は空くうになりながら、恐怖おそれと恥はじとに、渠かれ

は、ずるずると膝で退さがつた。

よろりと立つ時、うしろ姿がすつと隠れた。

外套も帽も引ひ搦つかんで、階きざはしを下りる、足が迂すべる。そこへ身体からだごと包むような、金剛神の

草鞋わらじの影が、髻ほうふつ髻ふつとして頭あれなかつたら、渠みちは、この山寺の石の壇を、徑こみちへ転落ころげおちた

に相違ない。

雛ほへみの微笑ほほえみさえ、蒼穹あおぞらに、目に浮うかんだ。金剛神の大草鞋は、宙を踏んで、渠を坂道へ櫓そり落した。

清水の向むこうはた 畠はたのくずれ土手へ、萋なえなえ々となつて腰を支ついた。前刻の婦おんなは、勿論の事、もう居ない。が、まだいくらほどの時も経たたぬと見えて、人の来て汲くむものも、菜を洗うものもなかったのである。

ほかほかとおなじ日向ひなたに、藤豆の花が目を円く渠を見た。……あの草履なぶを蹴うらつたのが羨やましい……赤蜻蛉が笑っている。

「見せようか。」

仰あおむ向けに、鐘を見つつ、そこをちらちらする蜻蛉に向つて、自棄やけに言つた。

「いや、……自分で拝もう。」

時に青空に霧をかけた釣鐘が、たちまち黒く頭上を蔽うて、破納屋やれなやの石臼まなこも眼が窪み口が欠けて髑しやりこつべ髑こつべのように見え、曼珠沙華まんじゆしやげも鬼火に燃えて、四辺あたりが真暗まっくらになったのは、眩めくるめく心地がしたからである。——いかに、いかに、写真が歴あり々と胸ありに抱あいていた、毛糸帽子、麻の葉鹿の子のむつぎの嬰兒あかんぼが、美女の袖を消えて、拭ぬぐつて除とつたように、なくなつていたのであるから。

樹島はほとんど目をつむって、ましぐらに摩耶夫人の御堂に駈戻った。あえて目をつむってと言う、金剛神の草鞋が、彼奴の尻をたたき戻した事は言うまでもない。

夫人の壇に戻し参らせた時は、伏せたままでソと置いた。嬰兒が、再び写真に戻ったかどうかは、疑うだけの勇氣はなかったそうである。

「いや、何といたしまして。……棚に、そこにござります。金、極彩色の、……は、そちらの素木彫の。……いや、何といたして、古人の名作。ど、ど、どれも諸家様の御秘蔵にござりますが、少々ずつ修覆をいたす処がありまして、お預り申しておりますので。——はい、店口にござります、その紫の袈裟を召したのは私が刻みました。祖師のお像でござりますが、喜撰法師のように見えます処が、業の至りませぬ、不束ゆえで。」

と、淳朴な仏師が、やや唸って口重く、まじりと言う。

しかしこれは、工人の器量を試みようとして、棚の壇に飾った仏体に対して試に聞いたのではない。もうこの時は、樹島は既に摩耶夫人の像を依頼したあとだったのである。

一山に寺々を構えた、その一谷を町口へ出はすれの窮路、陋巷といった細小路で、むれるような湿気のかびの一杯に臭う中に、芬と白檀の薫が立った。小さな仏師の家

であつた。

一小間硝子ひとこまがらすを張つて、

小形の仏龕ぶつがん、

塔のうつし、

その祖師の像かたちなどを並べた下に、

年とし

紀しご

紀はまだ若そうだが、額のぬけ上つた、そして円顔で、眉の濃い、目の柔和な男が、道

の向うさがりに大きな塵塚ちりづかに

対しつゝ、口をへの字形なりに結んで泰然として、

胡坐あぐらで細工

盤に向つていた。

「少々拝見を、」

と云つて、樹島は静しずかに土間へ入つて、

——あとで聞い

た預りものだという仏、

菩薩の種々相を礼しつゝ、

「ただ試みに承りたい。大なこのくら

いの像すがたを一体は。」

とおおよその値段を当つた。

——冷々ひやひやとした侘住居わびずまいである。

木もめん

綿縞じまの膝掛ひざかけを払つて、

筒袖のどんつくを着た膝すわを居り直つて、

それから挨拶した。そ

つときいて、

……内心恐れた工料の、心づもりよりは五分の一だったのに勢いきおいを得て、すぐ

に一体を逃あつちえたのであつた。

——

「……なれども、おみだしに預りました御注文……別して東京へお持ちになります事で、

なりたけ、丹、丹精ぬきを抽ぬんでまして。」

と吃どもつて言う。

「あなた、仏様に御丹精は、それは実に結構ですが、お礼がお礼なんですから、お骨折で

はかえつて恐縮です。……それに、……唯ただいま今も申しました通り、然るべき仏壇の用意も

ありません。勿体なくありません限り、床の間か、戸袋の上へでもお据え申そうと思いま
すから、かたがた草双紙風俗ふうにとお願い申したほどなんです。——本式ではありません。
忒利天とうりてんのお姿では勿体ないと思うのですから。……お心安く願います。」

「はい、一応は心得ましてござります。なお念のために伺いますが、それでは、むかし御
殿のお姫様、奥方のお姿でござりますな。」

「草双紙の絵ですよ。本があると都合がいいな。」

樹島は巻まきた蓑ばこを吸いさして打案じつつ、

倭文庫やまとぶんこ。……」

「え、え、釈迦八相——師匠の家にございまして、私てまえよく見まして存じております。いや、
どうも。……」

と胸を抱くように腕を拱こんで、

「小僧から仕立てられました、……その師匠に、三年あとになくなられてな。杖とも
柱とも頼みましたものを、とんと途方に暮れております。やっと昨年、真似方まねかたの細工場を
持ちました。ほんの新店でござります。」

「もし、」

と、仕切一つ、薄暗い納戸から、優しい女の声でした。

「端本^{はほん}になりましたけれど、五六冊ございましたよ。」

「おお、そうか。」

「いや、いまお捜しには及びません。」

様子を察して樹島^{かまち}が框から声を掛けた。

「は、つい。」

「お乳^{ちやうぶ}。」

と可愛い小児^{こども}の声する。……

「めめ、覚めて。はい……お乳あげましょうね。」

「のの様、おっぱい。……のの様、おっぱい。」

「まあ、のの様ではありません、母^{かあ}ちゃんよ。」

「ううん、欲^{ほし}くないの、坊、のんだの、のの様のおっぱい。——お雛^{ひな}様^{ちゃん}のような、の

の様のおっぱい。」

「おや、夢を御覧だね。」

樹島は肩の震うばかり胸にこたえた。

「嬢ちゃんですか。」

「ええ、もう、年弱としよわの三歳みつになりますが、ええ、もう、はや——ああ、何、お茶一つ上げんかい。」

と、茶卓に注いで出した。

「あ、」

清水にきぬ洗える美女である。先刻さつきのままで、洗いさらした銘仙めいせんの半纏はんてんを引掛ひっかけた。

「先刻は。」

「まあ、あなた。」

「お目にかかったか。」

「ええ、梅鉢寺の清水の処で、——あの、摩耶夫人様のお寺をおききました。」
渠かれは冷い汗を流した。知らずに聞いた路なのではなかったのである。

「御信心でございますわね。」

と、熟じつと見た目を、俯目ふしめにぼつと染めた。

むつくりとした膝たを敲たたいて、

「それは御縁じゃ——ますます、丹、丹精を抽んでますで。」

「ああ、こちらの御新姐ごしんぞですか。」

と、吻ほっとして、うっかり言う。

「いや、ええ、その……師、師匠の娘でござりまして。」

「何ですね、——ねえ、……坊や。」

と、敷居の内へ……片手づきに、納戸へ背向そがいに面を背けた。

樹島は謝礼を差出した。出来しゅったいの上で、と辞して肯ぜぬがえんのを、平にと納めさすと、きちようめんに、硯すずりに直つて、ごしごしと墨をあたつて、席書をするように、受取を——

記

一金……円也

「ま、ま、摩……耶の字？……ああ、分りました。」

「御主人。」

と樹島が手を挙げて、

「夫人のお名は、金員の下でなく、並べてか、……上の方へ願います。」

「あ、あ、あい分りました。」

「御丁寧に。……では、どうぞ。……決して口を出すではありませんが、お顔をどうぞ、

なりたけ、お綺麗になすつて下さい。……お仕事の法にかなわないかは分りませんが。」

「ああ、いえ。——何よりも御容貌が大切でございます。——赤門寺のお上人は、よく店へお立寄り下さいますが、てまえどもの方の事にも、それはお悉くわしゅうございましてな。

……お言ことばには——相好そうごう説法——と申して、それぞれの備つたおん方は、ただお顔を見た

ばかりで、心も、身も、命も、信心おこしが起るのじやと申されます。——わけて、御女体、そ

れはもう、端麗たんれい微妙みみょうの御面相でなければあいなりません。——……てまいただ、力、

力が、腕、腕がござりましょうか、いかがかと存じまするのみでして、は、はい。」

樹島は、ただ一目散ステエシヨンに停車場へ駈かけつけて、一いきに東京へ遁にげかえる覚悟をして言つた。

「御新姐の似顔ならば本懐です。」——

十二月半ばである。日短かな暮方に、寒い縁側の戸を引いて——震災後のたてつけのくるいのため、しまりがつかない——竹の心張棒を構おうとして、柱と戸の棧しなに、かツと極きめ、極めはずした不思議のはずみに、太い竹が篠しののようにびしゃつと撓しなって、右の手の指を二本打うちみしやいだ。腕が砕けたかと思つた——気が遠くなったほどである。この前日、

夫人像出来、道中安全、出荷という、はがきの通知をうけていた。

のち二日目の午後、小包が届いたのである。お医師いしやを煩わすほどでもなかった。が、繻ほ帯うたいした手に、待ちこがれた包を解いた、真綿を幾重にも分けながら。

両手にうけて捧げ参らす——罰当り……頬を、唇を、と思ったのが、面おもてを合すと、仏師の若き妻の面でない——幼い時を、そのままに、夢にも忘れまじき、なき母の面影であつた。

樹島は、ハツと、真綿に据えたまま、蒼白あおくなつて飛退とびしきった。そして、両手をついた。指はズキズキと身に応こたえた。

更あらためて、心着くと、ああ、夫人の像の片手が、手首から裂けて、中指、薬指が細々と、白く、薤しべのように落ちていた。

この御慈愛なかりせば、一昨おととい日片腕は折れたであろう。渠かれは胸に抱いて泣いたのである。なお仏師から手紙が添つて——山妻云々とのお言ことば、あるいはお戯たわむれでなかつたかも存ぜぬが、……しごとのあいだ、赤門寺のお上人が四五度もしばし見えて、一いちじよう定なぞらそれに擬え候よう、御許様おんもとさまのお母様の倂おもかけを、おぼろげならず申伝えられましたるゆえ——とこの趣であつた。

——樹島の事をここに記して——

筆者は、無憂樹、峰茶屋心中、なお夫人堂など、両三度、摩耶夫人の御像^{みすがた}を写そうとした。いままた繰返しながら、その面影の影らしい影をさえ、描き得ない拙さ^{つたな}を、恥じなければならぬ。

大正十三（一九二四）年七月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成⁸」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十二卷」岩波書店

1940（昭和15）年11月20日発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2008年10月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夫人利生記

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>